



5
4334
2



門 5
茶 4884
巻 2

信 節 上

上 嘉 佐 野

得 宵 月 三 見 入 者 也

重 井 月 三 見 入 者 也

筆 指 月 三 見 入 者 也

本 母 子 三 見 入 者 也

名 月 三 見 入 者 也

名 不 月

小 雨 三 見 入 者 也

雨

約 三 見 入 者 也

川 節 三 見 入 者 也

秋月やいらもあうの男山

水相観の繪

糸のきまてよめをわらわの吹

名月や尾酒の平しと頬より

得蟹無酒

懈を画ては友這する月

名月や五のうら松の彩

雨

納屋のゆゑ吹吹さげあつ月

名月や舟を定むるむら雀

夢うとよめ泉起て月の色

あつしき

更にと祿且の軒や枚の月

紀りいさあ

きりつらあまはあやころ月

新思

心よもあつしきや十四り

名月や金くしひるの雨の友

園のあひ吉原はうら月

月出そははれゆく小舟りあ

人音や月かんとめは伏見料

維摩のらし

山のそへ大衆こころ床の月

張良圖

胸中乃共出るあは乃月

布感の月を掬は給ふ

ありてあき水の月や瓜のよ

寺

ちの月あはう膾はあまもん

名月やうやくあは油に怪

ホウレての
鳥帽子屋はあはうんこころの

雨倚橋

猿遠子あはうんこころや橋乃月

含杏亭

あま入早を元掬やきよ乃月

風雨

雷は掬はあはきこころん舟

小野川けんきんうの饑

八月や長巻を袋あはあは

三日糧あつむのあ

名うろ十歩は錢を握り

巴江

聲のれく猿の齒白し岩は月

舟中よふていをもおとさきよ
こつら枝の梅よはらるるを

日へるも杖もつかけり小舟は

琵琶巴江をよむ

言あよ比巴を興い夜も扇
陽のあよ思ひおは酒をこ
灯をきめて深交いやすよ
村雨の心をありし私御の耳
をそいふらめ感あるる十三
より学ばるる曹保と秘曲
おはそか人を送しむさすける

またいもてつらよと云り
其は困ある時て所と色をひ
とあつものいあつても水
枕を投出たつ世風情及人
一藝有りやさいつを

十五く酒をのこもてけおの月

あさつ舟よつみを入る
月をこぼす水の干
舟のしんら給ふ

なりしつらかきつを誰月舟

所懐 京より

いそめ事こころを有きよのう

母と月をけるふ
あはれまは雨乞政乃十三夜

猿泊

ふれまや江尻て三種湯中三夜
葉研てハ粉炊かろすう湯の月
住の江や夜芝居こそ浦北と
白玉子芋を交さや流り月
ほの目上の太子れあおら
去るとすむ茶師が猿の
あつと躍りけり日傘

十三夜

やよみ月あつ初あき木橋可

国十五夜 あつ元來ハ
に戸ありつた

脚番亮ハ照月をら 濠河舞

平家源氏の
二舟月夜

宿あしのをとれては月を分

柴少のいあつる人

名月や皺者人の心世流
名月や人を抱手を膝尻
てよみ満を棹のめとみる鳥

詩集山

契不逢意

国の灯も光るを影や袖の月
一休の狂詠自画を思ふ

甲申律師め所相物をして月茶

松前のまき子

送り侍り

こころを大根て 秋の月

十六宿ハ儒者と名ふる

漬藁の穂子 丸月を

日十にお

笈の菓子なつて

病中制禁好

松樹乃津海氣をうす月友

秋宅

以汲をわけてみそやけ

宗周の月をうす

芋川 凡俗都の二百貫

玉の物よりけん

物うらとち豆よりり袖の月

鐘声 客船

名月や市堂の鼓を打て

遊子の身あるを松の影も 江戸の月

鷹鳴や弓弛をまねを身は月

玉津竹尾を

わのいづつお井の月を扱及ぶ
いさよひや龍眼肉りうし衣

上交詰上

平家ゆこち系龍あふ月記す

吉野のゆめをせーしう

こよひいれすいふいぬよの月記
せそそろしう龍あを

新改の月らん所や九月を

九月廿七の月を借

る月や大い思をぬ日を

あふ家と念



又月や陰を感はる故屋の中

ちや暮常あふい入て角をす

屋合やいづよ瘦地の風つり

雨好

散や石をかりの橋もよ

星名ぐら里お一愛あひま

新居

塀梢よりくよか銀河

天川けあの枝じや一志海り

あつたよ

踊子をまきりくく星ハ北

付能

刺精も廣くふ羽をうけり
舞あつた花ついでたふむく
二軍服も隣のむすめも五
かきしきや丸ちのふよこ川
軍衣や女のふあそふあん
何あひや覚えぬる言ひ終
花柳の治家等とれ軍もむく

地敷のりり

星阿比や双林塔若龍の音
橋と成鳥ハいつき夕あつた

七月新の錢肅山字

あけては海ら魚も軽し相の秋
昔花や角豆も星北あつた

小娘の生はきこきりけ確

少玉啼く花火の筒のわら音
格うさそきも逆橋もわらや
玉川のあふ糸
ふ火土賣
このわら音

水汲の曉起やすまの船

増上寺晚景

馬老也灯籠使のたき入

まゝらうらうらおとらふま

新水の敷くよりしほり傘

弄化注

あらしの子家とらふや天川

柳徑よみあふらうらう僧の
袖よりわらわらうをなす
りの授記局の有無價宝珠
と説せぬ心をわらうらう

夜あふ露ももらうら玉より

永げ島よあふ

慈山火を昔のまけや玉座

あすうらうの食ら親とん

子あふ人や隣れ玉より

得平酒

洲の隣あふや生あ玉

桐陰下けありき北阿婆
見る人もうつら打籠午とりりり
送りやうい

千々よ 黄牡丹下けあ

お高あをのうら二んは

稻つまやまのうらあひあ

妻のあはれな

らあつまやあまのうらあ

伴勢の鬼にうらあひる

かよ ちや青壁の舟あ

舟興

まをあり花火百のあま

扇的も火くうらあ

あまのうらあ

お新ようらあ

鬼灯のうらあ

悼コ齋

其人の舞はしあ

投られてはあ

よき衣の陣中やあまたの丸
ト石や志しよぬおてせお撲

氷のしめかき賣やお撲丸
相撲氣をば数月休の夕ふ
山城のすし跡ぬ形や活西此

遊品部

本屋や六尺は人唐めり
中の御より
幸傳り夢の海つきや昔松

雨後 二句

あま久る芭蕉よのりて
群吟を雷お顔よつと
葦の日陰おあり中夾巾
舞の立ちのやあめ物
株のおや蔭をうけて少松
いせせあげ松

種竹 三年

竹乃色許由りひささゆき情
つらともふはあはり庭の萩

長生を愛野をかりて
角ふまやいせの波飼乃花為
思ゆめりしつあや秋の暮
芦の程や蟬をよこしておかし
客至
碧池汲少るの埒や夢のむ

暮葉とりあき

影形よもあき年のみみ
花をとりし佐助の屋乃花盛
酢をしあき隣の夢の花盛

三遠な納

子稻酒や稻荷よひおた焼めと
病のちよは芽あくおあき夜
頬指やあもハせ人は虫包を

野店無肴核

足あき亭をよもつお酒小
酒買子りくああけの房紙

ゆ芽あき

化野や焼のらじの骨はり

春日法楽

と疾日秋の巻借をりけう山

四所の宮の巻借をりけう山
成の刻をかりけう山

野外夕虫とらふ巻借

晴吟や狂ひ志つ万巻借の月

相模川洪落水接天

狼の序木ありあや秋のあ

二挺きの帰棹

髪を燃し花つ連珠 星のあ

新匠や松よあけひの清田を

こゆらしきの巻借

甲斐野や江平くくと柳わたう

野中や岩あみくく元管根

みの巻借へて 素牛まで

破きん孫六多岐志津を友

あつ長者のりあて

中ねる小孫ぬ子あけし破

和の秋意

さし椎の音を仕よハ礎りも
真好乃殿やうつらひのうら

き里小野の虫のまほりて

吾方雨ハ屋もも枝とねらり

葎や樹草のあとの眉つらり

あいらのわくくり扇

関守の心ゆるすや栗かまた

大和のあやうおらり

泊瀬のふ柿のあやうおらり

蓋の秋意

清原や流柿さりすあ

葎狩や山の何もいふ虚ろ病

め中の葎うらり

葎狩や鼻のいそあるあらり

舟中

あし山の田生よ並のや秋の音

秋のや弱もゆうを轆の上

稻葉んよ女侍そつすのうらり

秋の音 尾上の杉をもあらり

隅田高橋之記

饒新瓶

遠野 駒ふ海をせぬ 賜目よ
松虫よ 孤をんれま友は
あつも隣を包むの巻
すむりや 繁をよむる 蚕

夜を山

冷虫や 松明をへし 荷をせし
山川や 松を 越ハ 河を 穿て
きりきり 于 山 田の 畔の 夕 光

二見ありて

岩のうへに 非 風 塵 して くれ 層

長谷越

山畑乃 辛 何る 何と 依 杖 ぶ 系
川 昔の 姿 平 あり 谷 乃 あり
遠 別 二 段 川 流 何 舟 まで
逆 水 大 切 所 まで
舟 櫂 難 ば 舟 乃 淵 の 色
一 夜 前 裁 と り あり を
舟 城 乃 何 子 入 ち ら せ ぬ あり

切怨きよして

日盛を帯傘とせ萩子序

おのひる

萩子序をひかりやササキ

晚松亭

獅子舞の胸分りあす萩の萩

楓子序

おどりぬい推の内併え

井筒を眺める昼又

いそはる竹輪もむす小萩の

田家

庭をの卯うみ控り萩種系
妻臺小稲ちん窓の多萩小

饒青流難成

荻刈のうらを喰せて萩小

隣家よもと控くを

大絃ハ晒にえ控りある雁

元結のぬる君をらむ虫の声

お高ニ帝の貝をようて

おげ出乃見よめておは新酒か

帝香月灯を憐

古寺や 洗紙 少子ん所ふ

駿府市番子籠くちのしるふ

くうよ子 砂持くも木洗桶

日仙石玉葉公所があまの詩あり

萩すりや 傘にうは 昔鞆

あつみのうらのか
花子 志太 糸

三栗のくはちりや 角被

在東寺まで

傍の羊の志つうりむの為るふ

松のこふその火先しけ為る

感微和るあふは

とをすや 髭衣よ玉に

品川 泛鉤

厚の版ん送るまや 舟の上

白をく 壺の遠はと 敷の厚

ふいよめ 喰そあ

貯啼や 赤子の 頬を吸ひ

吹檢よとりす 狸や 百舌の声

泥を浪の略よ 遠よりみよ

曳尾

五 歌の長上系

うら花の枝や一かたを

想 如是果のころを

ニ子山ニ子ひれん粟のうら

白 屋の淨者まで

燕もおもはれらみうらうて

賈固や夢のげしきまの海

鹿の一声をりふふうの

あうを誰り佛さこらて鹿の声

はばくやあまきよけ流

木過ぎりて

門立の枝くらある男鹿うそ

小原やみ紫をくく苺の尻

秋葉禪定の時

合おきそ花よすうやあまひる

下山

のしをふ枝を投りあふら

芭蕉ぬ片蘭を悼める詞あり

嵐紫一子孤懸を何それむ

半の子も芭蕉の秋をわらふ

あやふくをうけしるる目也
あやふくをうけしるる目也
あやふくをうけしるる目也
あやふくをうけしるる目也

二月堂のまのりり多々七日

新倉の傳堂のまのりり多々
いふふ急をうけしるる目也

日の目たぬあやふくをうけしるる目也

甚五たあやふくをうけしるる目也

けん快狂えしるる目也

産寧坂くくしるる目也

兼あやふくをうけしるる目也

戸部山庄

あやふくをうけしるる目也

あさお山を

あやふくをうけしるる目也

三条橋上

片腕ハ都一ののこにあやふく

あやふくをうけしるる目也

あやふくをうけしるる目也

あやふくをうけしるる目也

菅根

杖の上よりそらんく村にあり

高雄

け新嘗文賞家をとらせし

泊瀬

松ん家云家のあまういつせ山

山行

及後よお祭はくし片与の山

いせ

お祭よし能熊の拓といを冠り

舟の集
本集下巻の
末

旅思

卯句

南をやちのつとくのみ山はかく

南天の突を包めや柳原の色

南天や秋をうはむる小倉山

くらの山乃繪ふ

笈の角楯の草ふ志しれきり

七十の篠とそくすくつる度

いつくは稲を于瀬や大井川

山の端を下んあうすや破れ笠

水郷

唐船を流る水やあふん舟

富士

笠取とて富士の雪を望むる
おきやそを心多きとて下風

背面達しを画て

御帝の八田守とてしる
秋の風

旅思 二丁

こつくの指節らや水の昏

みろくの路中へ人のせりせり

召したに訓ふ方や花層

うづ栞やまも筋くまの山

本多下総守の
市代宴

後園

しきぬけの庭や澄摺菊の冬

手の内所敷こをれてまゝ水露

旅り

駕籠み濡て山道の菊をこぼす

志保しし子たを何なる菊の宿

荷合りの後 旅り

土室のゆきをこぼりやきよの菊

きよの菊小僧てまゝおしき好

まゝの菊や靴より何なるおしき

白鷺の墓石ありてさきくわあ
る重——地子這菊を先おん
こい准子初めのころれ 袋菊
素堂 孫菊の屋——

け菊くく十口此間乃亭主あり

昼菊

きく白く蒼ハ陽ふくねり

菜苑

菊を切ぬゆつ々もあうり

水鼻 ふくさめくぐり菊栞

病起 千山ヨリ菊ヲ
はて

大母衣乃ししろを扱や靴の菊

三鳴あて重陽

門酒やる金の腰乃きくをお

宮川のやぐり酒送せりて

重箱小花あそびの野菊か

みちとせのそしり名はゆきくの色
あひあひける子 おひひよりて

ひうて我七百のゆき菊あゑん

竹苑のやもあきをもま

出世者乃一りありしつり菊

翁はひるの交むよにせり

時服そ菊あはさく此芭片

十日菊

親世殿十日の菊をかきとり

女子を孫くひて

おかげらるんじ

かみ尿よりりもむの妹が

十日菊

震宴の妹よりりもむ菊贈

笠より西りの骨よ

菊を着てりりもむの妹が

袖の浦より貝つしよ

白菊を貝の内実よせん袖の浦

那波を九節の浦よりり

市連言の言林とよあむ

大工事の久ふ新や神の秋

御高よりりもむ

御極を元て髪たる

内宮 法神のを拜する

刃の姉や赤子もおける

あま

日ハ所て古殿ハ旁のかき

いつれよりりもむ

たしや小判あつて葉のふ

や津川よそ

花江よ祭主の菓を送りたり

冠里公沸りしすし祝きて

初唐や其場を以て百足持

周竹の蘆の昼よ

白鳥と一升入乃めく

栗家の菓を渡す

かつと来て福原林くうり立

元禄辛未のころ大山榎島へ系指

お川 総りあ書略之

品河もつねあつし唐の音

とん

稻塚の産塚つくく田守が

最決

宿とりて菓を回やうあひ

いせ

よろきや離く乃書麦 島

御句松よ

生栗を握はめしる 山後村

大山

細押やうら若根乃りみら

石窟なる僧

手ひ提し茶瓶や此めと苔の露

二間茶をよそ

白くの尾髪吹さるるまき

由井のぼる

お夢ふ一のなるおや母のおと

雪乃下りまじりて

破うら宿の庭ふや 茶乃初仕

露羅巴た乃古樹のりよそ

有一代の供奉の扇や ちる 祝香

横儿追悼

一嶽をよ白子とるや 新粧

酒より初を切影しとる各

一字を探るゆり間を

あいせをや おをを片けその 穴窟入

自画雁

斤是ハヤのーんこ小田の唐

秋のられ祖父のあつりあそ

白扇倒懸東海天といふる句
つまびやくしつこふお扇ていふよ
みきりしつこふお扇ていふよ
おき立おぼひて山の半腰より
いんじつこふお扇ていふよ
いんじんもほりちのりもてい

白老の西又いふ糸や普賢富士

未曉吟

鏡つらよ階子ふ立てころ菊ハ

洞房の茶を宗見とまの笛を

ぬげろりくせしつを憚て

とろくや笛のふみハ塗足履

悼朝叟

此人ふ二百十りのあはれか

吉田氏

唐祖も糸をきしころり日向邦

1524年 1525年 1526年 1527年 1528年 1529年 1530年 1531年 1532年 1533年 1534年 1535年 1536年 1537年 1538年 1539年 1540年 1541年 1542年 1543年 1544年 1545年 1546年 1547年 1548年 1549年 1550年 1551年 1552年 1553年 1554年 1555年 1556年 1557年 1558年 1559年 1560年 1561年 1562年 1563年 1564年 1565年 1566年 1567年 1568年 1569年 1570年 1571年 1572年 1573年 1574年 1575年 1576年 1577年 1578年 1579年 1580年 1581年 1582年 1583年 1584年 1585年 1586年 1587年 1588年 1589年 1590年 1591年 1592年 1593年 1594年 1595年 1596年 1597年 1598年 1599年 1600年

芭蕉翁十三回

辰や鳳尾の宮おとす

室永三戌十一日

妙身童女を葬りて

露の露土よかえんも被さし

秋世月かろく権くせし室
る所や福宮の石乃秋世日

玉律清のそと

師弟のあそびあそびり

高野の十月三日

卯塔の花表やけのも秋無月
雲くくは片のりやあふる
所をきけとめるはの聲の
心あや葱臺乃 片柳

芭蕉每三回

志らくや此も舟旅を墓糸
帆上げ舟河を也豊田のり

遊金閣寺

八雲の楠の板ををり川を
蓑を惹て流るるをあ夕川

大和めぐり世比

あゝ時雨之論の道たをり

芭蕉富病床

吹井より病をよす日くし時雨

治柿の夕日くかざるか

飼猿乃川窓つゝよ志くお

時あくる碑下のりて村霽

しづれあつたのらよあ酒の

きふ麻さかろのめんあて

小松の多人をあにふる山お

當院子冥室什物すかく多

中あも小松との松上くいま

いせくお松上げの硯あ

箱の上子馬蹄とくを硯の

松陰の硯子息を志くお

世をさるるにけりけりけり

三尺の力を西河に

本多総司公平信康の夜
あつ雨とひびくかきりの
鳴るるを後りせよと仰し

蝙蝠や柱を捨つる一

守山の子よりを昔時

と月のおらるる花子

あふい狐を清水に

揚るる名の下り

神の流酒匂ハ格と

家こ乃筆も居よと

大和のり

ころの城の寒さ

使者指書院へ通る

井波門主應心院殿

あまそうみとあま山乃二集
あまそあま

風や沖より

あまの家

紅雲の下

玄孫や祖父の

く孫の者けり

つゝ綿一鬼の耳をうらむ

大町 新宅

お仙平 鈍ついでの小崎屋
水仙平 杉ふりや星月夜
雨平 柳けしきや狐の尾
控へやあゝ〜 ぼろよお舟り

父り醫師あれを戯子

鈍汁よ又本村の咄り
何脈あゝ水のもろや下何系
何りけ〜 藤魚けり白きを
表戎十九日〜 くら〜 ぼろ〜

大黒の〜 せ〜 家よ〜

酔はめを大黒あ〜 夕〜 子
おお板子小判投りり美満
系五十七馬の宅あり

巻塚山や都ハ内り我が
人妻ハ大根は〜 りを鈍汁
お益子鈍も互りすの笑み
生煮を〜 ころ〜 かけ
世中ハ小舅をよめぬ〜 汁
日本の風呂吹〜 比叡山

あけぬの浦おのりて

純ひらりとくまら網り下

幻住菴よりと

雑ぬの名とくらあつてお

蕪汁や粟のかりたもとあつて

宗隆尼中はうらあつて

千那みくして聖田くると

薬のなほゆるる合やせこのお

蜜の刈蕪おうやうあつて

秘蔵うは瑞のかりやあつて

清けや祝まのこすあつて

あつてあつてあつてあつて

柳のまくは昔の憲はあつて

霊山のみなあつて

かおのまののるまはあつて

生活新五上京より

新の末乃扇あつてあつて

聖のまののあつてあつて

縁縁は徳者あつてあつて

はあつてあつて

神楽子あつてあつてあつて

志りしくもやれ一枯木乃夕附日

周遊するまで

の〜ひら三井の二王や冬木立

風や勢田の小橋乃花を溜

芭蕉翁をたゞりて

を指をさしつゝさ遣やむ口を

石菖の音もあれをや山は若

か生のしやのぶつゝいをなして

繕うるは子よらしく強縁はた

むしせ志の重なるは子お着

起出てる志けき力や足感中

寐んやこころあそこのさめを中

は子着てく〜路中もこけしは

長途狂倡

糸の子きくはる際もや大井川

目ぼりをを氣おし路中の信せぬ

山をわぬるせら色よの月をき

何となくを大隣をばれきり

け木やや韻のよこれておの月

果はや二をあきして京月夜

新宅 二句

竹の場乃か庭如し炭俵

崩りもやうをばやしを象

をさあ三十五りよ

お河のふらおすお袖を納豆汁

霜月朝日の例を

法人や嵐芝居をを象

お柳の市店

人をんしおのこもおも夕涼

勢もせや暁いさむ下邨の橋

お豊老父七十の冥平

白河の傍をかたや桐火桶

備別もあめつお一宿のすき

あつと六十年の栄花を派

溜子きりあて終りを取

はるるに神をささるる

や一はるるあしき

粟飯の焦て白あや葉の声

法雲寺老僧春色とらじり

原のや葉吹の家の夷講

はひり片を指家住あいろ小
蟻のこも子自のこも也葉の菊
控らんるの切やて火打か
鬚質の葉木賊のひと葉枝より

出ぬのとう其根うをけ冬構

咆のうらせ見を盃のてたを
とたか甘くならけよあせて

炭賣の炭くそをうれえやこる

柯求老しのま向

山茶毛や箱のれくらお盛物

あく障あしやさよ浪のり
みくれて木浦よはるあしは

山行

山犬をうら嶼出に雲おのち

みとれし刃くらゆくり池の響

寒芦画讚

何ふ産しく家いそげ葉の解

氷もし蓋とららと鶯の中

住吉しん

世のひをともより候すや冬の海

丁

用防とあり方ありて改
り行くと一生非ありひるま
をめぐり板つとあどやとや
この甲よりやけらるる
ひりひ出る

火煙うら青磁と砂を拾りり

斤手打落しとる火神を草の
まのりあそ

志高と灰よりくく火鉢ふ

名もこのりたらふ下
新し

炭より不乾のめり
手標

三年成乾の田子入

燭のや油をよめる金の甲



炭竈三句

炭や子の指とゆいん登のさ
炭よりや冷たぬ井、朝の松
炭よりや豚のほお鼻をらん
炭竈や煙をぬけた猿の声
か、すすも其木焚より後りり
うつら火の七曲をきけやあうり
地中より草やく人を薫に
炭屑みいやく出る木焚を
とるあうかの一車とあめ炭

寒蠅炉をめぐる

悟おれてあうらうらうら人の蠅

口切や袴のひら子流薩葡萄

梅津某結田一良かき
粉聖の宿まで送付てし

ころよ春を女志つゝ一細代さ

不居安慰

多々雪の燭を焚きぬや灰せり

山中 高客

袷卷の松みくろや三種のぬ

並膚ハひくろの謝や寒作り

十石ハ驚ふつくしけりおんる

冬川や篠のすすき竹の糸

困倚橋

うけしゆや澄もあき橋柱

豚幅や氷の中よわたり松

裡一いつりりあけりすほり糸

煮味や篋子の竹乃すす疏

あま

内務の古酒をぬらりや室の梅

市隅の倚人

宮さまをばしあはせを矢念賣

揚屋のかきこめをうたの
野の色をうたをうた

野の色や 筑紫の食ひたすけ
心もや 釜のゆらぎをうた

浦瀬のうたをうた 大津の

細衣のうたをうた 佐の古巻

塩櫃子や 投てきも 小磯

よき日 和の月のまゝ ちり

妹のうた 龍の足 ちり

薩摩山とて

汐波の筑首 筑波のうた

所々 鷹のうた ちり

京のうた 案内とて

高野のうた 永江のうた

滝のうた 池のうた

人形講 月次

沖のうた 十のうた

お國橋上 二句

兜のうた ちり ちり

宮のうた ちり ちり

酒飯のうた ちり ちり

去来家まじ

千々々らか首刈らるるを辨如

ことく九めそよよし津和

南都よのそよ時

寒色や南大門のりふ徳月

ひらら帯のよふりりあこ

かりひよのそよ時

とれとらるる縁起すんて里津棠

お神楽の鼻息白く面の内

雪買ふをを治さや雪の音

清和徳のりふりて

あーれ雪の舞臺の目北気色

知恩院町よ宿とらて

初雪よあつたつららの雪つた

大津よあつたつら

雪の身や船底よの雪の色

ひららこの宿めて

馬くらは貪りしふ雪の宿

寒山のいん

める恩の門の雪はくを食ふ

西運寺興行

初雪ふくもあつきの伏ん舟
あつきのあつきの雪一笠のうへ
あつきのあつきの赤子あつきのあつきの
あつきのあつきの雀の枝あつきの
あつきのあつきの雪をうへへ

あつきのあつきのあつきの雪の川

燐屋

窓鏡のうき世をふたゆきあつきの

官城御普清成終つては
ゆき美あつきのあつきの

陪臣ハ朱買臣シ申す乃袖

色蕉をうきあつきの

表老ハ釜もあつきの 庵のうき

川のうき梅ありあつきのあつきの

山居の傍

雪をうきあつきの茶を煮たりた山

あつきのあつきのあつきのあつきの

あつきのあつきのあつきのあつきの

あつきのあつきのあつきのあつきの

醉吟

雪うきあつきのあつきのあつきの

望敷山

為雪や大の字枯る山の草

戸障子りおのい雪し松乃声

かかや竹田へ帰る少子の言

旅し女土佐をさるる

黒塚の客あしらふや国乃言

五律廻

げつ雪や内よおさうか人を誰

めつしいおう浮おは垣めうか

鴨川の雪を秩輪よちんりふ

或師方より雪分んめちんを

ぬあさ上中

初雪ふ物やえされそ雪もあち

楠の瓶壺四周は一回もや

万客の唇をさるるせえ

まつ雪や湯のこ所の大瓶壺

ぬもすりそい川と云わたり

半袷の別添とありや雪の松

人も来ぬぬ独酌

初雪や十も成るは酒のこし

軍兵を園茨てまらや雪磔

松の芳苔ふつこのはらりきり

前より雪のり

歌集の人となりつけの雪

おちる盆のりしちかあは

出はし

すきよの犬を拂わぬ袖の雪

あまのりあるとらふあま

あまのりあるとらふあま

あまのりや控えてあるふきの宿

市中深

初雪や門を閉ぢる夕ちか

不分當春作病文

酒あて病を悟はしるあは

極月十日西吹大坂の月あ

いとほや足袋賣よきしつうの山

新堰あて食らわうの師走か

餅花や灯をきく壁の籠

餅と尻と宿はきくくくく

やうれを又や狭き道のり

書如くをゆとり一斗の巻柱

座右銘

以事や空より取らる覺書
乳母ふえて去るも養女年忘
御前中百殿よりくはり
のりおの中は眠り

年忘劉伯倫を可い述て

震國流火志つありて

妹より也薑とけを餅の番
妹掃てぬいぬ女房ありや

京より春をさるる年

かりの猫も回るあり

以事の牛はひらり年あり

臘鬼五つの子を産り樊中

やいおをねておれありけい

可をいひひ

年をさるる兒も親へ頼ぬ豆

すけりひ粥とて悦て世控

童ふら志とる院中や煤をい

忠信う芳野仕とやあはれい

おかしき親の悟氣もあは

用窓は羽幕をめぐり

煤こもるとつもれを人の隙は

鼻を掃孔雀の玉や煤こも

御煤翁ハ竹取

千山家と一高小

割すもやハと女神楽男が

揚屋と一醉房して

意の子養紙巻を片く

身の市せれをあらわし羽織の

小形織物てあふらと一掛

山陵のま方を海す一

女子の抱瘡一

餅の粉や必雪くつる神の

乃高云百り津無は巻袖

系あけ乃をあげたる神楽

市隅

弱法師家門ゆるせ餅の札

燈籠屋の夕日志らげ

糸と松あまの市の夕あし

自海 三十

子さのしんまのあしきまのあし

大洋譯

千觀のるもせにやとらる

雪窓

損料の史記を却をの雪窓
卒の用やひしめのむ稽の物思
以年や終評定しあぬを

